



(恵果阿闍梨)

日々好日

大正六年五月



日々好日は信心から

日々好日

六六三号

薫風爽やかな季節となりました。五月にはこどもの日と母の日があります。

私は法事の席で父母恩重經をお唱えさせていただくことがあります。この經は中国で成立した偽經だとされていますが、大乘本生心地觀經卷第三報恩品第二の上にこの經に説かれるほほ同じ文言がみられます。

今日、父母の恩とか孝養などといえば死語に近い印象がありますが、それでも「悲母の在す、これを富むと為し。悲母の在さざる時、これを名づけて貧と為す。悲母の在す時、名づけて日中と為し。悲母の死す時、名づけて日没と為す」と説かれ、子にとって母の存在は太陽の如き大きく温かい存在でありましょう。

しかるに、子は時に「頼んで生んでもらったことじゃない」とか「どうせならもつとましな家に産んで欲しかった」などと悪態をつきますが、經には「人のこの世に生まれるは宿業を因とし父母を縁とせり」とあります。

これは輪廻を根底にしていますが、前世で自ら為した行為にふさわしいところに死後、生まれ変わったのだという事です。つまり、自らが父母を扱んで生まれたという事です。玩味すべき教えではないでしょうか。

弘法大師のお言葉

「恒河の女人は子を愛するによつて天上に生じ、坐海の丈夫は慈悲を發して以て大覚となる」

(子を愛念するがゆえに女はガンジス河に溺れても子を離さず共に死ぬもその善根によつて天上界に生まれ、海で身を犠牲にして五百人を救った男はその功德で仏になった。) (性霊集卷第八)



真言宗の寺院では伝持の八祖と称する八人の祖師の軸を堂に掲げます。弘法大師は八番目で、大師に真言の法を伝授された惠果阿闍梨が第七祖です。

祖師名はここではあげませんが、真言の僧侶でなくてもすぐに判別できるのはこの惠果阿闍梨なのです。他の祖師は手にされる持ち物によってその名を知るのですが、惠果阿闍梨は持ち物ではなく、童子（法全大徳）がそばに寄り添うように描かれているのです。

この惠果阿闍梨については大師の著述でその総てを知ることができません。大師の入唐求法は遣唐使船によるものですが、嵐に遭遇して福州の赤岸鎮に漂着するも海賊扱いをされ上陸を許されません。

遣唐大使に代わって筆をとった「福州の觀察使に与うるが為の書」などの名文で入国が許されたことなどは今までにも幾度か書いてまいりましたが、そのようなことが遠く離れた長安の惠果阿闍梨の耳にも入っていたのでしょうか、中国僧に伴われて訪れた青龍寺で初対面の大師に惠果阿闍梨は、「我れ先より汝が来ることを知って相待つこと久し、今日相見るに大いに好し。大いに好し。報命竭きなんと欲すれども付法に人なし。必ず須べからず速やかに香華を辨じて灌頂壇に入るべし」と、仰せられたという。

（御請来目録）

この師資の出会いほど感極まるものはありません。この出会いによって真言の法教は瓶の水を器に濯ぐが如くに余すことなく大師に伝えられたのです。

惠果阿闍梨には三千の弟子があつたにも拘わらず、付法に人なしと云い、寿命が尽きること近きを察しておら

れ、付法伝授の法資を目にされた師の喜び安堵感が胸にひびきます。それはまた大師にとつても大きな喜びであり、好運であつたということですから。受法の数か月後には入寂されたのですから……

しかし、惠果阿闍梨は大師に法を伝授されただけではありません。

「真言秘蔵は経疏に隠密にして図画を仮らざれば相伝すること能わず」と。供奉丹青・李真など十余人を喚んで胎藏金剛等大曼荼羅等一十舖を図絵し、兼ねて二十余の経生を集めて金剛頂などの最上乘密蔵の経を書写す。

また供奉鑄博士（楊忠信）趙呉を喚んで新に道具一十五事を造る」

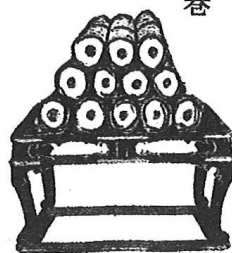
（御請来目録）

惠果阿闍梨が大師に託された品々は大同二年十月廿二日に朝廷に奉進された上表文によつて知られます。それには、

- 新訳の経 百四十二部 二百四十七卷
- 梵字真言讚 四十二部 四十四卷
- 論疏章 三十二部 百七十卷
- 两部曼荼羅 伝法阿闍梨影像 十舖
- 法具 九種
- 阿闍梨付属物 十三種

この具体的な品々が御請来目録に列挙されています。その中で曼荼羅一つを例にとつてみましょう。

- 大毘盧遮那大悲胎藏曼荼羅 一舖 七幅 一丈六尺
- 金剛界九会曼荼羅 一舖 七幅 一丈六尺



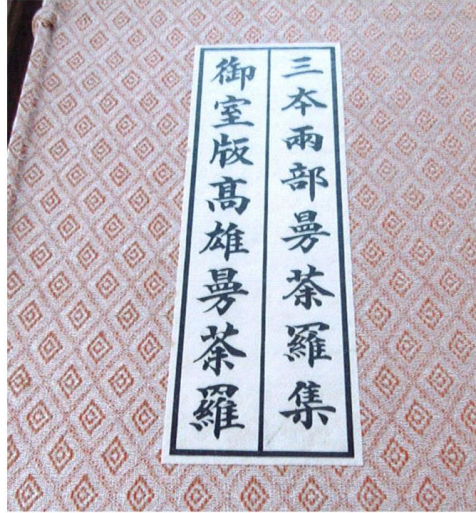
その大きさがいかにも大陸的であり分量です。それはまた真言密教の法蔵の深重さを教え示しているともいえます。

後年、請来したこの曼荼羅を修復したのが「御室版高

「雄曼茶羅」ですが、その原寸大の白描画（帙入り）を購入したのが数十年前のことですが、恵果阿闍梨が描かした大師が伝えられた曼茶羅であり、七祖、八祖である恵果阿闍梨と弘法大師の御徳を偲ぶに足る貴重な品である。

六月から八月にかけて伝授をされ、膨大な数量の經典法具・曼茶羅。祖師影像等々を写し描かせ造らしめた恵果阿闍梨は、燈火が油が尽きて消えるようにその年の十二月十五日入寂されたのです。

大師は多くの弟子から選ばれて阿闍梨の碑文を撰せられています。長文ですがその中からその一節を見てみましょう。



「縦使、財帛軫あどを接え田園頃うらを、比ぶれども受くることあつて貯たくわへることなし。資生を屑くずにせず、或いは大曼茶羅を建て、或いは僧伽藍処を修す。

貧を濟たすむに財を以てし、愚を導みちくに法を以てす。財を積たまざるを以て心とし、法を慳けんしまざるを以て性とす。

故にもしは尊、もしは卑、虚しく往ゆいて実まことちて帰かへる。

近きより遠きより光を尋ねて集会することを得たり」と。

このわずかな文面によっても恵果阿闍梨の人柄、僧としての処し方がよくわかります。しかし、手本とするにはあまりにも高貴で手には届きませんが、余香を感じつつ余命を全うしたい。



この恵果阿闍梨が住まわれた長安（現西安）の青龍寺を参拝したのは弘法大師御入定千五百年の年、昭和十九年のことで、十一月五日に参拝しています。

青龍寺址に恵果・空海紀念堂が建立され宗団をあげて奉祝し兩祖師の遺徳を偲んだことでした。

新築の御堂には兩祖師が向つて右に恵果阿闍梨、そしてその左に空海さまが安置されていました。

その寶前で理趣經をお唱えしたことなどを写真を見るとつい昨日のように思い出されます。



兩祖師の脇には全国の信徒の奉納した御写經がうずたかくつまれていたことが印象に残っています。私も幾枚か奉納しています。

その参拝から十五年後の平成十一年には中国地方の第七地域伝道団の参拝団にも参加させていただき再度、恵果・空海紀念堂をお参りさせていただきました。前回は見違えるように広い境内は整備されており嬉しく思ったことでした。

遷移九年の春

歳月の巡ることの速さを実感する毎日ですが、来年は此処通津に移転して十年目を迎えます。加えて万徳院の本堂新築から満三十年となります。

当山も万徳院も復興を遂げて面目を一新していますが、それは本尊の加護と檀信徒のその都度の信心の賜物です。この十年、或いは三十年の間にはその中の多くの方々が浄土妙国に旅立たれ、住む境界を異にしておられます。そうした方々の熱く尊い信心の誠を、今を生きる方々と共に偲び讃え、生きる縁としたいという思いをこのところ強くしています。

それは本堂などの建物だけでなく仏像仏具などの修理修復から幾多の荘厳具などを様々な仏縁を機に御奉納いただいていることからの思いでもあります。

私は彼岸明けのこの春、そうした品々を拾いあげてつ器帳を作成しました。それは毛筆書きの仰々しいものではなく、パソコンに入力しただけの事ですが：

江戸時代、つまり藩主吉川公の庇護をうけていた時代のもは本尊弥勒菩薩像、弘法大師像の他数点の額や軸物があるのみで、江戸時代の什物帳に記されているものは廃寺の際の混乱で何一つ伝わっていないことを改めて確認したことでした。

現在目にするほとんどの物は先代住職の五十年間と私の住職四十年の期間に御寄贈頂いた品々であることを改



めて認識しました。それは枯れ落ち葉が風に吹かれて一処に集まるようににとでも言つてもいいほどの数量である。その中でも特筆すべきは大般若経六百卷(十二箱入り)は、私の晋山記念でしたが、六百人の施主によるもので、その重量は寺の重々しい格式を象徴するかのようでありあります。

また、隅切春日厨子入りの千手観音は寺の混乱期を乗り切るための力強い支えとなった御仏ですが、七百余名の協力がありました。

これらは檀信徒が心一つにして御協力ご支援していただいたもので、お寺の長い歴史の中でも特筆すべきものでありましょう。

こうした寄贈の奉納物はその都度寺報に施主名等をおかけして謝意を表していますが、それは先代も同様で私以上に詳しく書き残しています。それによつてそれらの物品の価値感が上がるように思います。護持していかなければという気持が強いものとなります。

万徳院は幕末廃寺にはならず存続はしたものの、藩主の庇護がなくなり、信徒絶無の寺院で明治以降代々の住職は寺の維持にまで心が回らない困窮寺院であった。

しかし、それでも本尊五大尊明王・弘法大師像・十二天軸・八祖大師軸・涅槃図などが現存しています。それらすべてを先代が完全修復し、表装を新にしています。

その他、広家公直筆という「万徳院掟」の巻き物などがあり、市内随一の由緒ある真言寺院であることは間違ありません。

当山と万徳院のかかわりは、亡父が住職をし、現在は長男弘昭が住職しているという今日現在の関係だけではありません。

それは、広家公が岩国に転封される以前からかかわりがあるのです。当山も万徳院も吉川氏と深いかかわりが

ありますので、ここで、岩国以前の吉川氏に関わる歴史を北広島市のガイドブックによりみてみましょう。

吉川氏は駿河の国（静岡市清水区）の吉川経光が承久の乱で安芸国大朝本庄の地頭職を得ることに始まり、経光の孫の時代に大朝本庄に移った。

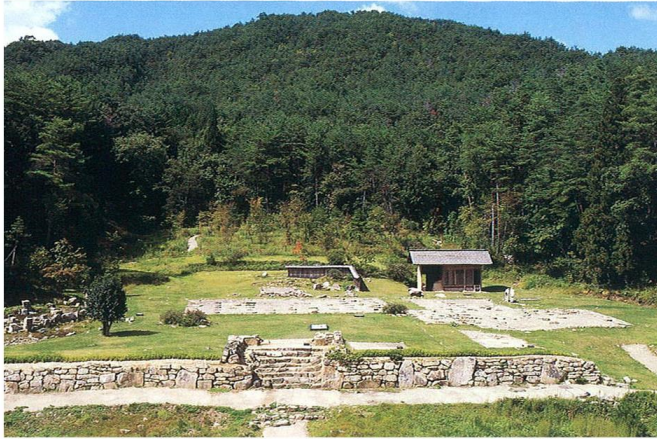
吉川氏一族は此の地で勢力を拡大し、十五世紀前半には石見国に本拠を置き、（略）十五世紀後半七代経基は応仁の乱で軍功があり鬼吉川として知られ現在の北広島町千代田に勢力を拡大したが、十代興経は毛利氏と対立するようになり、親毛利方の謀ごとによって座を追われ、吉川氏の系譜は断絶。

かわつて吉川氏を相続したのが毛利元就の二男元春で天文十九（一五五〇）年、日山城へ入り、戦国大名として領地を拡大していく。

この元春の長男元長が天正二（一五七四）年頃、日山城の南西の麓標高四四〇㍎の山中に建てたのが万徳院である。

それを元長の死後、吉川家の当主となった弟の広家が敷地を東西一六五㍎、南北三三〇㍎に拡大し、そこに二〇〇㍎の参道を設け、石垣や庭園をつくるなど元長の菩提所として大改修したものである。

現在、国道四三三号線をはさんだ向かいにある吉川元春館跡などとともに「史跡吉川氏城館跡」として国の史



跡に指定されています。

此の境内には本堂の礎石があり、東西八間、南北六間で京都の禅宗寺院にみられる方丈型本堂に似ているとう。

ガイドンスホールとして本堂の外観をモデルにして再現されています。また、サウナのような中世の蒸し風呂も全国ではじめて復元されています。

広家の正室（宇喜多秀家の姉）容光院の墓所もあります。岩国の万徳院には幕末まで元春の正室（広家の母）慈光院の五輪塔がありました。現在は吉川家墓所に移されています。これらによっても万徳院と吉川氏との関係の深さがよくわかります。

石見の国にあった龍門寺もまた、吉川氏の勢力が安芸国に及ぶ十五世紀の何時の頃か現在の北広島町に移されたものと考えられます。

元長が戦国の世で敵も味方もおおくの死者・負傷者がでたことを嘆き自分が罪深いことを悩んで、多くの仏の助けが必要だと考えて宗派にとられない諸宗兼学の寺として建立したのが万徳院で、広家が菩提所としてとのえる中で、龍門寺をはじめ多くの寺院が万徳院の頭中寺院として扱われるようになったことが、万徳院由来記によっても窺われます。

（次号でもより詳しく見てまいります）



■万徳院跡ガイドンスホール「青松」

凶少施を軽んじて福無しと為すなかれ

仏は舍衛国の祇園精舎に千二百人の大比丘衆とともにありました。

その頃、国内に豪富の長者がありました。その妻、一人の男児を生みました。その時、長者の屋敷の内に美しい花々が天より降り注いだのです。長者はそれを知って華天と名付けました。

その子、年を経て仏のもとに行き仏の類なき相好を目にして大いに感激して心に思うのでした。

「われ、生まれてはじめて聖なる尊者に遭うことを得たり。仏と衆僧を請じて食を供養したいものだ」と。

そして、仏に申しました。

「願くば世尊。明日、遠き田舎の我が家に衆僧と共に足をお運びいただけませんかでしょうか。青物の食を供養いたしたく思っています」と。

仏は華天の招請を受けられました。

華天は家に帰り仏の座を美しく飾りました。仏は衆僧とともに至り供養を受け給いました。その後、華天のために諸々の法をお説きになられたのです。

これを聞いて華天は仏を信敬し、仏弟子になりたいと父母に告げたのです。父母はこれを許しました。

仏のもとに行き、出家して弟子になりたいと言いました。仏が佛道に入ることを許すと、頭髮は自然に落ち袈裟を身に着けた沙門となったのです。

華天沙門は仏の教えを遂修して日を経ることなくして羅漢（小乗佛教の悟り）を得ることが出来たのでした。

仏弟子阿難はこれを知って仏のもとに至り合掌して言いました。

「世尊、華天比丘はどのような福を植えて生まれる時、天より華が降る瑞祥があり、仏と我ら比丘衆に飲食の席を設けることができたのでしょうか。今また出家するや速やかに羅漢果を得ることができたのでしょうか」と。

仏は答えられました。

「阿難よ、よく聞け。過去世、毘婆尸佛の世に在る時、衆生を輪廻の苦より解脱せしめんがために衆僧と共に諸処を遊行しておられたのである。」

その時、何れの村落でも人々は何物かを携えて供養をしていました。在る時、一人の貧しい男が供養するものが何もなく、それを悔やんでいました。ふと思いついて草むらの小さな花々を採って仏と衆僧に供養し、至心に敬礼して去ったのです。

阿難よ、その時の貧人が華天比丘その人なり。過去世に信敬の心をもって華を供養し至心に求願したことが九十一劫を経て達せられたのである。

そしてその縁により出家し修行して羅漢の果を取得することが叶ったのである。この故に阿難よ、一切衆生は少施を軽んじ福無しと為すこと莫れ。華天の如く悉く意の如く得るべし」と。

その時、阿難及び諸々の比丘等、仏の説き給うところを聞いて歡喜して奉行せり。（賢愚経巻第二・十）



高野山奥之院弘法大師御廟前奉納御写経 五四一

二卷奉納 岩国市装束町四丁目 福島 松代殿

二卷奉納 岩国市南岩国町二丁目 沖本あつ子殿

一卷奉納 岩国市通津 吉岡 律子殿

（三月十一日～四月十日奉納分）

あとがき

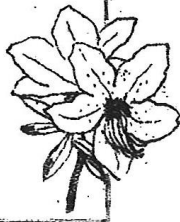
暖冬で桜の開花は早いと言われていましたが、みごとにその予報はずれ、例年より遅く新入学の学童の入学式を祝福するかのように咲いていたのは、永く印象に残ることでしょう。

境内でも数本の椿が咲きつづきが咲き始めました。このところ雨の日が多く草も生き生きと存在感を示しています。いま一番の願いは叶わぬことですが、雑草のような生気が欲しい。草抜きは不参の為体である。

ホームページを開設して一年になりました。今年の一月からこの寺報をホームページでも見ていただけようになりました。写真はカラーでありより現実感があります。スマホでも見られますのでより多くの方々に頂きたいと思っています。

先述の通り、新天地をもとめて通津に移転して明年は十年目となります。これを好機ととらえて移転事業にご協力をいただいた檀信徒の方々に、感謝の意をこめて本尊遷移、本堂落慶法要を再現したいと考えています。

それはお四国八十八ヶ所と西国・坂東・秩父百観音の御砂踏みを再現し、山あり谷ありのそれぞれの人生を振り返り、その困難さがあればこそその結願の喜びを思い起こして頂きたいということです。その日を心待ちに信心の日々をお過ごし下さい。



発行者

高野山真言宗

寶池山 龍門寺

吉岡 光昭

讃うべし

唐の都の

青龍寺

大師の師なる

恵果阿闍梨を

岩国市通津 3634 番地 3

☎740-0044

高野山真言宗

寶池山 龍門寺 発行

☎岩国 (0827) 38-4611 番